



所轄の助けを得られないのは不利だなと、土産屋の連なる通りをブラブラと歩きながら柴田は考えていた。

休暇を取った上での行動では、さほど思い切った事が出来る訳でもない。

土地勘の無い街。

情報を得るにもひと苦労しなければならない余所者の自分。

経費で落とせない、あれやこれや。

将来、警察をリタイヤする時が来ても興信所勤めだけは御免被りたいものだ

所詮は桜の代紋頼みの稼業なのだという自覚はあった。

もとより正義感から警察官を志した訳などなく、退屈な会社勤めは出来そうも無いという軽い気持ちで採用試験を受けただけなのに、気がつけば現場の水に慣れ空気に染まり、意地のようなものまでいつの間にか抱え込んでここまで来てしまった。

しょっぱながいけなかったんだ

やっと辿り着いた刑事という肩書きを堪能しようとしてた矢先の、あの事件…

影の通り魔

闇男

商売しか頭がない新聞も雑誌も、人斬り野郎にミステリアスな名前を与えて書き立て、世間も乗せられて騒ぎ立てる。腹が立った。

犯人を挙げられない警察の無能に対する非難にでなく、騒ぎ立てている連中全てに、だ。

必ず犯人を見つけ出し、この身体の奥の奥に溜まった反吐を、世の中全部に…いやその前にあの外道に向かい吐きつけて、俺は大声で笑ってやる

擦れ違った男が一瞬、怪訝な顔でこっちを見たような気がした。

たぶん顔を歪ませて笑う俺を見たからだろう。

我ながら嫌な癖だ

嫌な顔だ

柴田は目についた店に足を進めていった。

◇

今しがた擦れ違った相手に微かな『臭い』を感じた男は、暫く歩いた後さりげなく振り返った。

そいつは丁度、土産屋に入ってゆくところであった。

刑事、か…

姿が見えなくなるのを待って、男はジャケットの懐から携帯電話を取り出した。

「北さん、俺です。尾道に入りました」

「やけに早えじゃないか。自家用機でも乗ってきたか？」

「まさか。今どこですか」

「引き返してる。見たんだ。ありゃあ多分、鴉の弟だ」

「刑事らしい男を見かけました。地元の警察という感じじゃなかったです」

「そうか。とりあえずそれは置いとけ。例の旅館の前で待ってる、合流しろ」

「了解」

携帯を切り、男はきびすを返した。

◇

旅館を後にした殉と加夏子の前に、薄影が二つ、たそがれの空を背に立っていた。
中背のがっしりした影と、それより頭一つ分背の高いスラリとした影。

「だれ？」

加夏子の声に応えず、影は更に近付いてきた。

「どうしたの？ 誰かいるの？」

「ジュン」

彼女の声に緊張と不安を感じ、殉は車椅子の取手を強く握りしめた。
影が二人の男になった。

「あなたは…」

肉厚の中年男を見て加夏子が声を漏らす。
坂道で擦れ違った、あの男だった。

「覚えていたかい。いい記憶力だなお嬢ちゃん」

中年男が言った。

「俺たち人を捜してる。一人はお嬢ちゃん達が捜してるのと同じ、もう一人は…まあいい、とにかく一緒に来てくれ、時間が惜しい」

「名乗りもしない人と一緒になんかいきません。あなたたち誰なの？ 私達に何の用？」

「歩きながら話すさ、さあ」

「止めてください！」

手摺りに掛けてきた手を、反射的に加夏子が払った。
彼女の動きを察知した殉も大きく右腕を横になく。
中年男の頬に当たった。

「ハウ、さすが鴉の弟だな。血は争えねえか」

「鴉って何ですか？ 彼女イヤがってるじゃないですか！ ちゃんと話も出来ないんですか？ みっともないですよ！」

「なんだとお」

止めようとする長身の男を置き去りにし、中年男が殉の襟首をわし掴みにした。
その時。

ざわ

いつの間にか旅館の玄関脇に現れた白服の男達が、手に手に棒やら大根やら包丁やらを持って周りを取り囲んでいた。
中央にはあの漁師の老人と、板長らしき男が立っている。

「うちの客人に手え出すなら、ただじゃ済ませねえぜ」

「ツネさん、荒事はいかんぞ」

「わかってらあ」

ツネと呼ばれた男が柳包丁で肩を叩きながら前へ出た。

「お嬢の知り合い…それもこんな子供を、大人二人がかりで連れてこうなんざ見逃せねえぜテメェら」

包丁を中年男の顔面に突き出す。

誰にも見えなかった。

次の瞬間、包丁を持つ右手ごと肩関節を極めた長身の男が、もがく板長を抑えながら初めて口を開いた。

「すみません。危害を加えるつもりはないんです。マツタク…北さん血の気が多過ぎるからこうなっちゃうんですよ」

長身の男は、涼し気な目で周囲を一瞥すると殉と加夏子に向き直った。

「真山といいます」

◇

小さな喫茶店で、四人は向かい合っていた。

加夏子と殉が肩を並べてちょこんと座っている前で、北山がふてくされた態度でふんぞり返っている。真山は両肘をテーブルにつき二人を静かに見ている。組んだ指越しに覗くまなざしは傍々としていて、何を想っているのか伺い知れない。

「君達には悪いことをしたね」

「もういいんです。真山さんは悪い人じゃないみたいだし…」

言いながら加夏子が北山の方をチラリと睨んだ。

「北さん、いつまで臍曲げてるんですか。彼のいいぐさじゃないが『みっともない』ですよ」

真山に言われ、ぶほうと一つ牛のような溜め息を吐き出した北山は、モゾモゾと椅子に座り直すと大仰に頭を下げた。

「スマン」

言ったそばから顔を上げ、二人をぎょろりと睨む。

「だがなあ、そんなに俺は悪人面に見えるかね？ そりゃやり方が強引だったのは認めるが」

「見えるわよ、普通に極ワル親父ってカンジ」

加夏子はきつい視線を緩めようともせず北山を睨み返した。

「極ワルねえ…きつついなあ、最近の若いコは」

「若くなくてもおんなじです」

「やれやれ…」

苦虫を噛み潰したような顔で、北山が派手に頭を搔いた。

殉は、加夏子と北山の遣り取りを聞いていないかのように真山の座っている方から顔を逸らさなかった。

1分もしないうち、彼の表情が不審と驚愕で歪んでくる。

聞こえない。

『声』が、何も聞こえないのだ。

聞こえてくるのは、静かな雑踏…とでも言えばいいのだろうか、まるで高速道路を遠くに見下ろす丘の上で聞こえる夜の街の音のようなもの。心の声は欠片も響いては来なかった。

こんな事は…こんな人は、今まで会ったことがない

「何か『聞こえた』かい、堀川くん」

組んだ指越しに、染み入るような笑顔をゆっくりと浮かべて真山が訊ねた。

加夏子と北山が弾かれたように二人の方を見る。

「…夜。夜の街の音、かな…あとは何も…」

「そうか」

僕もまだ捨てたもんじゃないなと微笑みながら、真山はゆっくりと本題を切り出した。

「僕らが捜しているのは、あの女の子と、君のお兄さんなんだよ」

真山がポツポツと話し始めた。

◇

僕は以前、ある警備会社にいた
名前位は聞いた事があるだろう、大手のセキュリティサービスだ
僕はそこで、ある特殊な部署に所属していたんだ
君達が見かけるような、道路工事や駐車場の誘導をやってるような人達とは違う

現金輸送？ あれはあれで大変な仕事だが、それでも一般的業務って奴さ
要人警護？ ハハ、テレビの観過ぎだぞ
エライ人はみんな自腹で警護人を雇っているもんだ

僕が相手にしていたのは、異常犯罪者さ
世にいうストーカーって奴だ
被害者を守り、連中を捕縛して犯行を防ぐ、それが僕たちストーカーストッパー、略称SSの仕事だった

ここまで話すと、真山はテーブルに置かれたコップの水を一口飲んだ。それを食い入るように加夏子が見つめている。

「…そう。君の事件が起きた時、あの店に僕も居たんだ。相棒と一緒に。そして奴に一瞬の隙を突かれた。君がそんな姿になったのは僕達のミスなんだよ」

「あの時、あそこに？」

「スマナイ」

今度は真山が、加夏子に向かって深々と頭を下げた。

「あの頃…毎日お見舞いに来てくれた人がいた…全然知らないひと…雨の日はズブ濡れになって…あの人は？」

「酒井 俊一。当時の僕の相棒だ」

◇

「奴って、あの男って誰なんですか？」

沈黙を守っていた殉が突然、大声で真山を問い詰めた。

「真山さんは知ってるんでしょ?! 教えて下さい!」

「それは今も判らないんだ、あの事件は恐らく迷宮入りになるだろう」

「嘘だ! 真山さんは知ってる筈だ! 北山さんだって! さっき言ったじゃないですか、『君の兄さんを捜している』って! あれは何なんですか?! 碧ちゃんの事と兄さんは何の関係もないじゃないですか! カナがここにいるから、僕といるから、ここまで来たんじゃないですか!? 教えてくださいっ!」

加夏子ですら初めて見る形相で、殉は真山にくっつかかっていた。

「僕の『声』は聞こえるかい」

静かに真山が問うた。

席を蹴り立たんばかりだった殉の興奮が、少しずつ収まってくる。
やがて大人しく答えた。

「…いいえ…」

「それが僕の返事、だ」

君の兄さんの件は別の話だ

僕も、ここにいる北山さんも、君の兄さんと命を取り合った仲なのさ

懐かしい話でもするように真山が言った。